

Title	H・ルフエーヴル著 吉田静一訳 カール・マルクス：その思想形成史
Sub Title	
Author	白井, 厚
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.9 (1960. 9) ,p.810(72)- 811(73)
JaLC DOI	10.14991/001.19600901-0073
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600901-0073

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

立史論(有斐閣刊)とは異なり、戸原氏はいわゆる「宇野理論」に立脚して分析を展開する。すなわち、「正しい現状分析をおこなうためには、資本主義の世界史的な発展段階に特有な資本の類型」を明らかにすること、従って、「帝国主義段階に特有な」それを明らかにすることが、「段階論としての金融資本論の課題をなす」と考えている。そして、その最も典型的な発展のみられるドイツ金融資本について分析すること、成立した金融資本の性格を明らかにするために、成立に至る過程を分析すること、の二点が強調される。このような視点を立って、「ドイツのルール地方における重工業と銀行との関係の発展という点に問題限定し、ここにおいて産業資本が成立・発展し、さらに大不況という過渡期をへて金融資本が成立するに至る過程」を実証的に分析することが本書の目的とされている。この点も、大野氏の書物が、一応ドイツ全域について、主要な産業諸部門における独占の形成とその金融資本への転化を問題にしていたのと異なっており、また、大野氏の書物の後半が当時の経済政策の分析にあてられていたのに対して、戸原氏の場合は、政策の変遷はその時期の状況を理解するための概

観として取上げられるにとどまり、経済の基礎過程の分析に主力が注がれている点でも、両者は異なっている。なお、全過程は、「産業資本の成立と発展」の時期として一八七〇年以前と、一八七〇〜八〇年代の「金融資本への移行」の時期と、一九世紀九〇年代と二〇世紀初頭の「金融資本段階の成立」の三つにわけて論究されている。(東大出版会・A5・三七七頁・九〇〇円)

—大島通義—

H・ルフェーヴル著
吉田 静 一訳

『カール・マルクス』

—その思想形成史—

この書は、フランスの著名なマルクス主義哲学者でありながら、修正主義者として共産党を除名された話題をまいた Henri Lefebvre の Pour connaître la pensée de Karl Marx, 1947. を訳したものである。内容は序論、誕生から『宣言』までのマルクスの生活と著作、『共産党宣言』から『資本論』へ、『資本論』、結論、からなり、まさにマルクスの思想を知るために重要な材料を提

供しているといえよう。執筆のねらいは、入門書と専門書の中間の水準で、マルクス主義学説全体をできるだけ凝縮したかたちで提示することといわれているが、デカルト、パスカル、デイドロ、実存主義などについて多くの著作を持つだけに、単なる概説書ではなく豊富な問題提起に満ちており、また出された問題と対決しようという積極的な態度が強く感じられる。序論ではマルクス主義と祖国、宗教、科学性、唯物論という言葉、個人の役割、理想、などについての偏見を一つ一つ取り上げて分析しているし、哲学批判から経済学批判に至る初期の著作を扱っては、独自の考察を加えて読者の注目を集めているのだ。

たとえば、「経手稿」でヘーゲルから継承されたものは矛盾の弁証法理論ではなく哲学的な疎外論であると云い、「ドイツ・イデオロギー」においては、唯物論に没頭したため、弁証法は放置され、それは「経済学批判」において再発見されたと説く。そこで『哲学の貧困』にマルクス主義的唯物論の方法の定式をもとめるべきではない(一九四頁)し、また『宣言』を読むにあたっては、その発表が『経済学批判』に先んずること二〇年、

『資本論』第一巻に先んずること一五年であったことを忘れてはならない。資本主義の科学的分析と科学的認識、すなわちその構造、その内的運動、プロレタリアートの地位、その政治的可能性の科学的分析と科学的認識は、ただこのあとの著書のなかにも、ふくまれている(二二九頁)ということが強調される。この書の特徴は、展開しつづける思想はその展開の中でのみ研究され得るし理解されようという立場から、マルクスの比較的初期の作品を、マルクス主義の形成過程において、その運動過程の中において位置づけようと努力したことにある。(ミネルヴァ書房・B6・三四六頁・三九〇円)

—白井 厚—

W・M・デイシー著
紅林 茂 夫訳

『現代イギリス銀行論』

本書の原著名は The British Banking Mechanism (1938) である。初版は一九五一年に出版されているが、本訳書は五八年の改訂版によっている。デイシー氏はロイズ銀行顧問である。

この書は英国人にとっては好適な金融論の教科書である。金融というと、とかくフィナンスを思い出させるが、フィナンスはむしろ資金のやりくり、力点がおかれており、バンクは資金のやりくりの相手方となる金融機関全体としての資金の流れに焦点が合わされる。そのメカニズムだから、資金の流れのカタクリというのが題名の意味であり、この意味では内容は題名を極めて忠実に果している。筆者は英国金融市場の特質を割引市場に求め、その市場が商業手形の割引から、大蔵省証券の割引に主役を演ぜしめるに至ったことを示している。この意味で金融市場資産の重要性を認めている。この解明は英国金融市場の理解の為の要となることを筆者は力説している。

同時に英国の金融市場は国内金融市場だけを引離して考えられない程国際金融市場と密接な関係をもっていたので、その観点から為替の問題—為替平衡資金—が論ぜられている。

英国人にとって好適と述べた理由は英国の金融事実について、英国人には耳なれた、コンソル、ゴールド・エッチ、テンダー、タツ

ブ等々の言葉が使われ、実例も豊富にもられている。しかし、一方外国人には——訳書は外国人が読むためのものである——もし、英国の金融事情に通じているのでなければ、物が何か分らぬということから生ずる理解の困難さ——理解出来ないというのではない——を倍加する点もある。これは訳者注でも加えられていたらと思われ点がある。又実務家の手になり、実務家によって訳されている為極めて当り前のこととされている点で訳注でもあればと思われ点がある。例えば、銀行家の間で投資と云ったら証券投資のことであるが、理解されはするが、説明があったらと思われ。

—村井俊雄—

よい本であるだけに訳者がもう少し労力をおしまねばより多くの人により多くの理解を与えるのと思われ。その意味で訳が原著に忠実でありすぎる感が強い。(東洋経済新報社刊・A5・一九六頁・四五〇円)

新刊紹介